

日本語母語話者と中国人日本語学習者の「断り」の 対照研究

邱, 利華
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494491>

出版情報 : 比較社会文化研究. 8, pp.57-76, 2000-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :

日本語母語話者と中国人日本語学習者の「断り」の対照研究

邱 利 華

0. 序 論

日本語学習者の中には、日本語が流暢でも、コミュニケーションがスムーズにいかないという問題にしばしば直面する者がいる。これは言語学的レベルを超え、社会文化や「丁寧さのルール (politeness principle)」¹⁾の違いなどと関わっている問題である。

それぞれの言語で丁寧さに対する認識が違うことは言うまでもない。中国人日本語学習者である筆者自身の観察では、中国人日本語学習者が、中国語の「丁寧さのルール」をそのまま日本語に持ち込んだせいで、ミスコミュニケーションが起こる事が少なくない。

近年、日本語教育の研究領域は、音声・形態・統語論のレベルから、語用論のレベルまで広がってきた。特に注目すべきものとして、学習者が依頼、謝罪、感謝、断り、不平、ほめ言葉などの発話行為 (speech act) を、第二言語 (以下 L2) でどのように表現し、またそれが母語話者のものとどのように異なるかを調査する対照研究があげられる。

特に、「断り」は話し手よりも聞き手を脅かし、聞き手の面目をつぶす可能性のある言語行動 (Face Threatening Act 以下 FTA) であるため、高いレベルの語用論的能力を必要とする。中国人日本語学習者には、「人に頼まれるとき、どう断ればいいのか分からないから、どうしても引き受けてしまう」、「断り方が相手との関係によって違うことは分かるけれど、どこが違うのかは分からない」、「相手を傷つけるのではないかという心細さがある」など、「断り」に関する疑問や不安が多い。また、「敬語」=丁寧さという考え方や「デス、マス調を使えば無難」といったような誤解も少なくない。

「断り」は社会文化や人間関係と深く関わっており、その誤りは重大な誤解を引き起こす恐れがある。コミュニケーションがスムーズに行われるためには、言語学的知識だけでなく、語用論的知識も同様に重要である。

本研究では中国人日本語学習者の発話行為「断り」を取り上げる。「断り」は招待、申し出、依頼、示唆などへの応答の形で起こるが、本研究は中でも日常生活によく見られる依頼に対する「断り」のみに焦点を絞って論を進め

る。

日本語母語話者、中国人日本語学習者 (以下「学習者」) 及び中国人母語話者の「断り」を比較考察し、学習者の日本語での「断り」が日本語母語話者とどの程度、どのように違っているのか、学習者の母語の語用論的影響があるのかを明らかにしたい。

1. 先行研究概観

1.1 先行研究

近年、中間言語の研究で、語用論的側面が注目されてきている。Thomas (1995) は、語用論 (プラグマティクス/Pragmatics) は「相互交渉 (interaction) における意味」、意味を明らかにするというのは、話し手と聞き手の間の、そして発話の (物理的、社会的、言語的) 文脈とその発話の選択可能な意味との間の意味の取り決めに関わるダイナミックな過程であると主張した。従って、語用論の知識の有無がコミュニケーションがスムーズに行われるかどうかに関わってくると思われる。

前にも述べたように、コミュニケーションがスムーズに行われるかどうかは「丁寧さのルール」と大きく関わっている。Brown & Levinson (1987) では、すべての人間は自分を侵害されたくないという欲求 (negative face) と他人に理解され、認められたいという欲求 (positive face) とを持っているとし、この2つの欲求に配慮するためのストラテジーとして、それぞれネガティブ・ポライトネス (negative politeness) とポジティブ・ポライトネス (positive politeness) という2つの枠組みを提示している。前者は防衛のため、強制を避けるための方略を意味し、曖昧な言い方をしたり、謝ったり、選択の自由を与えたり、相手の行動に対して干渉することを避けたりという表示をする。後者は連帯のための方略であり、共通の基盤を築き、聞き手に好感を与え、価値観が共有されていると感じさせるものである。また、Leech (1983) では、協調に焦点を当て、六つの丁寧さの原則すなわち「気配り、寛大性、是認、謙虚、合意、共感」を提示している。

異文化間の「丁寧さのルール」の差異は、ルールの相違

として理解されるのではなく、「無作法」「礼儀しらず」という印象として捉えられる。そのため、深刻なミスコミュニケーションを起こす大きな要因となると考えられる。L2 学習者がどのように「丁寧さのルール」を駆使して、コミュニケーションを行っているのかが、注目されてきた。

学習者の発話行為上の誤解を引き起こす要因として、プラグマティック・トランスファーが挙げられている。プラグマティック・トランスファーとは、L2 学習者が目標言語を用いる際に自分の母語の知識や「丁寧さのルール」を使ったために起こるディスコースレベルの負のトランスファーのことを言う（藤森1996）。

プラグマティック・トランスファーがあるかどうかを判断する際、まず、母語話者の発話の特徴を明らかにする必要がある。中国語、日本語それぞれの母語話者の「断り」の研究は、Chen ら（1995）と、カノックワン（1995）が行っている。Chen らは、中国語母語話者が「弁明+代案」という「断り」のストラテジーを好んでいると述べている。カノックワン（1995）は、日本語で多く見られる「断りの構造」は「理由のみ」か「理由+不可」であると指摘している。

学習者のプラグマティック・トランスファーに関する研究も少なくない。日本人英語学習者の「断り」に関する研究としては、Beebe ら（1990）が代表的で、上級の日本人英語学習者に意味公式²⁾の順序、頻度、内容にプラグマティック・トランスファーが見られたと報告されている。

中国人・台湾人日本語学習者と日本語母語話者のストラテジーの選択基準について、山口（1997）では、日本人はまず「上下関係」、次に「親疎関係」、さらに「緊急度など」、中国人・台湾人留学生はまず「権限」「威信」、次に「親疎関係」、さらに「緊急度など」をそれぞれの判断基準にしていると述べている。

学習者の「断り」行為を日本語母語話者、中国人母語話者と比較研究したのは藤森（1996）である。ここでは、学習者の「率直型」「曖昧型」の使用率が中国語母語話者と近似し、プラグマティック・トランスファーの一例として出されている。但し、本研究で行うような上下親疎関係との関わりには触れていない。

1.2 先行研究における問題点

先行研究の方法の問題点として、

- (1) データを収集する調査方法
- (2) 被験者の基準及び場面設定
- (3) 分析に用いる意味公式の分類

が挙げられる。

1.2.1 調査方法の問題点

学習者の発話行為のデータを得るために使われてきた方

法として、① DCT ② ロール・プレイ ③ 自然のスピーチ、が挙げられる。この中でも、DCT が一番多く用いられ、次に、ロール・プレイ、自然のスピーチと続く。以下それぞれの長所と欠点を見ていく。

① DCT

DCT(Discourse Completion Test) (談話完成テスト)³⁾の長所として挙げられているのは、必要とする資料を多数の被験者から効率的に収集することができる（熊谷1993、初鹿野他1996）、学習者がさまざまな発話行為を実現するために用いる意味公式の種類についての情報が得られるし、学習者が発話行為の遂行に重要であると考えられる社会的要因も明らかにしてくれる（エリス1996）などである。

欠点として挙げられているのは、

記述式の場合、実際よりも答えがコンパクトになりがちなこと、間の取り方や声の調子などコミュニケーションにおいて重要な方策になりうる手段による伝達面が拾えない（熊谷1993）、断り行為を相互行為としてとらえることは難しい（初鹿野他1996）、引き出されたデータが正しく実際の言語使用を反映していないかもしれないので、どの程度、学習者の語用論的な能力の証拠となりうるのかが疑問である（エリス1996）

などである。

② ロール・プレイ

ロール・プレイ (Role Play) (役割演技)⁴⁾の長所として挙げられているのは、調査しようとしている特定の行為を行うための談話の文脈を構成する能力が、学習者にどの程度あるかについての情報を与えてくれる（エリス1996）、二者のインタラクションを観察できるという利点を持つ（熊谷1993）

などである。

欠点として挙げられているのは

実際のやり取りであれば相手の反応などを見ながら小出しにするかもしれない発話を一息にまとめて言うということ、やはりある意味で不自然な発話の姿になってしまう可能性がある（熊谷1993）、データが現実の言語行動を忠実に反映しているのか、或いは彼らの言語意識を反映したもののなのかという疑問が残る

などである。

③ 自然のスピーチ

自然のスピーチが一番理想的であるが、目的に合ったデータを一定の数まで収集するのは、とても困難である。そのため、この方法を使った研究の数は多くない。

以上、三つの調査方法それぞれの長所と欠点を挙げたが、本研究の調査では、これらを参考に、その欠点をできるだけ小さくする努力をした。

1.2.2 被験者及び場面設定の問題点

これまでの先行研究では、①母語話者の基準②学習者の基準③場面設定にも問題があると考えられる。以下それぞれについて論じていきたい。

① 母語話者の基準

学習者の発話の基準になるため、母語話者の発話行為はより一般的なものでなければならない(エリス1996)。しかし、母語話者の被験者としては妥当ではないと思われるような先行研究もあった。例えば、生駒・志村(1993)では、日本語母語話者として集めた日本人の中に、米国滞在年数がかかなり長い被験者がいた。英語母語話者として集めたアメリカ人の中にも日本語学習歴や日本滞在経験のある被験者がかなりいた。

② 学習者の基準

先行研究では、学習者の学習歴の差が目立つ。例えば、生駒&志村(1993)では、アメリカ人上級日本語学習者の学習歴が3年~10年であり、藤森(1994)では、中上級の中国人、韓国人の日本語学習者の学習歴が6ヶ月から6年であり、いずれもかなりのばらつきがある。

③ 場面設定

Beebeら(1987, 1990)のDCTの場面設定では、日本語母語話者も調査対象であるが、日本社会ではありえない場面がいくつかあった。おそらく、これはアメリカ社会を基準に場面設定を行ったためだと思われる。例としては、上司に給料を上げてもらう場面、上司の示唆を断る場面などが挙げられるが、このような場面設定は日本人にとっては実感できない事柄であろう。

また、Beebeら(1990)、生駒ら(1993)などでは、上下親疎関係を研究対象にしているにも関わらず、緊急度の異なる場面設定をしている。このような設定では、ストラテジーの変異がどの要因によるのかがはっきり言えなくなる恐れがある。(本研究の被験者の基準及び場面設定は2.2で説明する。)

1.2.3 分析に用いる意味公式の分類の問題点

発話行為「断り」を分析する際、「意味公式」が分析単位として用いられている。しかし、意味公式が分析の基盤になっているにも関わらず、多くの研究はその枠組みを十分に検討されてこなかった。以下、意味公式の分類の問題について少し触れていきたい。

① 調査方法の相違による問題

先行研究で使われている意味公式の分類(横山1993、熊井1993など)のほとんどは、Beebeら(1987, 1990)⁵⁾を参考に修正を加えたものである。Beebeらは、DCTで収集した日本人とアメリカ人のデータに基づいて意味公式の分類をした。これはほかの調査方法で収集したデータには適切ではないと思われる。ロール・プレイや実際の会話によ

るデータはDCTのデータより複雑であり、その分類もより精密に行わなければならない。DCTで収集したデータはターンが少なく、発話が一まとまりであるという特徴を持つものに対して、ロール・プレイや実際の会話から得たデータはターンが多く、発話が短いという特徴が見られる。

② 形式と機能の関係

意味公式は機能に基づいて分類されたもの(Cohen & Olshtain 1981)でありながら、従来の分類では形式に偏っている部分がある。例えば、Beebeらは「繰り返し」を「回避」のカテゴリーに分類しているが、これは単に相手の話を自己確認し繰り返しているケースとも考えられる(本研究はその機能によって「回避」と「付随表現」の両方に分類した。2.3を参照)。

また、エリス(1996)では、Beebeら(1990)での意味公式の分類について次のように指摘している。Beebeらが「間接」と区別した意味の定式は、2種類あって、それらは区別が必要であろう。例えば、「願望」と「弁明」の区別である。「願望」はその準備をするなどして直接の拒否と共に用いられる一方、「弁明」は直接の拒否の代わりに用いられる。

③ 程度差の問題

例えば、「無理です」、「無理かもしれない」、「ちょっと無理です」などは一つのカテゴリーに分類していいのだろうか。また、「代案」の中に、「他の人を探したら」と「友達を紹介しましょう」があるが、話し手の聞き手の問題解決への貢献度が異なると考えられる(本研究では、「代案」をさらに二つに分類した。2.3を参照)。

以上の問題があるため、意味公式の分類を再構築する必要があると思われる。そして、その分類をより明確にしていくことが本研究の課題の一つである。

2. 調査

2.1 目的

本研究は「ストラテジーの選択基準」、「L2能力とL1プラグマティック・トランスファーの関係」について複眼的視点から考察していく。

① ストラテジーの選択基準について

日本人は「上下」で(Beebeら1990、高田1992)、中国人は「親疎」でストラテジーを選ぶ(高田1992)というのがこれまでの定説であると考えられる。しかし、この説は十分に検証されたとは言えない。

山口(1997)は、発話行為を選択する時の判断基準の順序として、日本人は「上下関係」を、中国人・台湾人日本語学習者は「権限・威信(面子)」「親疎関係」をそれぞれ優位に置いているとの結果を出したが、これが母語の影響か

どうかということについては触れていない。藤森 (1996) は、中国人学習者の断りの方略について考察し、この研究では、プラグマティック・トランスファーが見られたとしているが、依頼に対する「断り」の場面では親疎の要素がなく、「上下」「親疎」関係の影響には触れていない。

本研究では、日本人は「上下」で、中国人は「親疎」で戦略を選択するという考察の結果が正しいかどうか、学習者にプラグマティック・トランスファーがあるかどうかを調べる。

② L2 能力と L1 プラグマティック・トランスファーの関係について

L2 能力 (proficiency) と L1 プラグマティック・トランスファーの関係について Beebe ら (1987) (断りに関する研究) は、高い運用力を持つ日本人英語学習者 (ESL) はより低い運用力しかない学習者よりも、よりたくさんの母国語のパターンを用いたと述べられている。その根拠は「低いレベルの学習者は社会文化的に適切な日本語のパターンを記号化する言語学的な蓄積に欠けるので単純な方略に頼るが、高いレベルの学習者は社会文化的な転移を可能にする言語学的手段を習得している」ためである。その他にも、多くの研究がこの結果を支持している (Blum-Kulka, 1982; Cohen & Oslhtain, 1981; Tanaka, 1988 など)。

一方、中間言語研究 (語用論以外) では、低レベルの学習者の方に高レベルの学習者よりも多くのトランスファーが見られるということが明らかになっている (Taylor, 1975; Major, 1986; Wenk, 1986 など)。語用論研究では、Maeshiba ら (1996) (謝罪に関する研究) が中級レベルの日本人英語学習者 (ESL) が上級レベルの学習者より、多くの母国語の謝罪戦略を用いたと述べている。これは Takahashi and DuFon (1989) と Robinson (1992) でも支持されている。

Beebe らと Maeshiba らの対比的な結果は何を物語っているのだろうか。Beebe らの調査対象は平均滞在歴 7 ヶ月の学部生 (低レベル) と平均滞在歴四年の大学院生 (高レベル) とに分けている。Maeshiba らは TOEFL のスコアで 400 から 500 (中級) と 510 から 620 (上級) とに分けられている。このように被験者のレベルを単なる学歴、滞在歴或いは成績で分けることに大きな問題があるのではないかと思われる。Takahashi (1996) では、目標言語社会とどのぐらい接触しているのかが語用論的能力を左右する大きなポイントであると指摘している。語学力は低レベルでも、L2 の言語環境を熟知していれば、低レベルの学習者が高レベルの学習者よりも母語の戦略に頼らなくなるのではないかと考えられる。

また、Olshtain and Blum-Kulka (1985) では、目標社会での滞在が長ければ長いほど学習者はより NS のルー

ルを好んだという結果が出されている。つまり、語学力も L2 の言語環境への認知度も高ければ高いほど、母語に頼らなくなる (転移が少なくなる) 傾向があるのではないかと思われる。Beebe らも Maeshiba らも日本人英語学習者 (ESL) についての研究で、(中国人日本語) 学習者の L2 能力とプラグマティック・トランスファーの関係に関する研究はまだない。

本研究では中国人日本語学習者の日本語の能力と中国語のプラグマティック・トランスファーの関係を考察点の一つとする。Maeshiba ら (ESL, 謝罪) とは学習者のタイプも、発話行為の種類も異なるが、言語習得の普遍的発展の角度から L2 能力とプラグマティック・トランスファーの関係は Maeshiba らの結果と同じであると仮定する。すなわち、上級より中級の方が、よりプラグマティック・トランスファーが見られるのではないかと考える。中級と上級の発話を比較し、語用論的知識の運用力の差を考察し、そしてこの仮定が正しいかどうかを明らかにする。

2.2 方法

1 章で述べたように、ロール・プレイは DCT の欠点をある程度補ってはいるが、データが現実の言語行動や被験者の言語意識を忠実に反映しているのかどうかという問題が残っている。本研究でもロール・プレイを用いるが、その欠点をできる限り小さくするため、データをサポートするためのアンケート (学習者の日本語学習歴、日本滞在歴、余暇の過ごし方など) とインタビューを用いる。これらによってロール・プレイ時に於ける言葉で表されない言語意識を探る。

本研究では以下の段取りで四つのグループ (日本語母語話者 (JJ) 同士、中国語母語話者 (CC) 同士、日本語母語話者と上級学習者 (CJ-上級)、日本語母語話者と中級学習者 (CJ-中級)) において、それぞれ 10 組でトータル 40 組のロール・プレイを行い、データを収集した。(1 組が 8 場面のロール・プレイをした)

2.2.1 被験者

母語話者については、1.2 でも述べたように、その発話が学習者の発話の基準になるため、被験者を集める時には、様々な要素を考慮しなければならない。そこで、本研究では、知的、教育的レベルがそろっていることを日本人母語話者被験者の条件とした⁹⁾。

中国人母語話者被験者の条件として、「日本に来たばかりかつ日本語がほとんどできない人」とした。そのため日本語の言語環境にほとんど影響を受けていないと見ていだろう。

学習者については、できるだけ似たような背景の学習者

に被験者として協力してもらった。

中間言語用論研究では、学習者のレベルが中級か上級かを判断する基準は定められていない。本研究では、Robinson (1996) を参考にし、以下の方法を用いて中級と上級を分ける。

- (一) 口頭能力自己判断 (アンケートによる)
- (二) 調査者の判断 (ロール・プレイ、インタビューでの学習者の日本語の正確さ、流暢さによる)⁷⁾

被験者の詳細は以下のとおりである。

【日本語母語話者 (JJ)】

人数：20名 (10ペア) 年齢：22歳～26歳 職業：大学生 (2名) 大学院生 (18名)

【中国語母語話者 (CC)】

人数：20名 (10ペア) 年齢：25歳～36歳 職業：公務

【中国人日本語学習者上級 (CJ-上級)】

表2.1 調査者が上級と判断した被験者

	日本語学習歴		口頭能力自己判断	日本滞在歴	日本人と過ごした余暇の時間(%)	年齢	男・女
	日本で	中国で					
1	0.5	4	中	2	70	27	男
2	1.5	2	中	1.5	50	21	女
3	6	1	中	6	25	28	男
4	7	0	上	7	10	36	男
5	5	0	中	5	10	33	女
6	1	6	上	1	15	29	女
7	5.5	0	中	5.5	30	29	女
8	8	0	上	8	90	28	女
9	3	0	上	3	50	25	女
10	6	0	中	6	50	26	女

(相手役の日本人10名はそれぞれ学習者の友人か知り合いであり、背景は省略した)

【中国人日本語学習者中級 (CJ-中級)】

表2.2 調査者が中級と判断した被験者

	日本語学習歴		口頭能力自己判断	日本滞在歴	日本人と過ごした余暇の時間(%)	年齢	男・女
	日本で	中国で					
1	2.5	0	中	2.5	70	25	女
2	2	1	中	2	5	22	男
3	0.3	6	上	0.3	40	26	女
4	0.5	4	中	0.5	30	23	女
5	2	0	上	2	40	21	女
6	2	0	初	2	10	23	男
7	2	0.5	初+	2	不明	21	男
8	2	0	中	2	10	22	男
9	2	0	上	2	50	21	女
10	1	3	中	1	50	23	女

(相手役の日本人10名はそれぞれ学習者の友人か知り合いであり、背景は省略した)

員、教師、大学院生 (理系)

日本滞在歴：一ヶ月～1年 日本語レベル：ほとんどできない

2.2.2 場面設定

ストラテジーの変異に影響する他の要因を省くために、本研究では、同じ場面で人間関係 (上下、親疎) のみ変え、日本社会にも、中国社会にもありうる場面設定をし、調査を行った。表2.3は場面設定の詳細である。具体的な内容はロール・プレイカード (付録) を参照されたい。

【相手】 親しい先生、親しくない先生、(親しい同等の) 友達、(親しくない同等の) 知り合い

- 【場面タイプ】 ①翻訳をしてほしいという依頼を断る
②学園祭の準備を手伝ってほしいという依頼を断る

2.3 分析に用いる本研究の意味公式の分類

意味公式の種類は生駒&志村 (1993)、横山 (1993)、李威 (1999)、ポリー・ザトラウスキー (1993) などを参考にし、今回の調査データに基づいて、修正を加えた。

以下意味公式の機能及び例を紹介していきたい。例文はすべて今回のデータから拾い上げたものである。学習者の発話もそのまま引用し、文法の間違ひは分析の対象外である。

- I 直接的な断り (不可の表明)：直接的に断りを言う；それ自体で断りの意味が伝達可能となる。
 - ① 遂行的：断りの行動そのものを表す
「できればお断りしたいんですけど」——JJ
 - ② 非遂行的：不可能の表現
「できれば遠慮したいけど」——JJ
「ちょっと無理かな」——CJ-中級
「恐怕帮不上你的忙」(お手伝いできないと思います)——CC
- II 間接的な断り：間接に断りを言う

表2.3 場面設定

ロール・プレイ場面	場面的コンテキスト	断る相手——断るもの
①	翻訳を依頼される	親しい先生——大学生
②	同上	親しくない先生——大学生
③	同上	親しい友達——大学生 (同年輩)
④	同上	知り合い——大学生 (同年輩)
⑤	学園祭の準備を依頼される	親しい先輩 (3年生) ——後輩 (1年生)
⑥	同上	親しくない先輩 (3年生) ——後輩 (1年生)
⑦	同上	親しい同級生——同級生
⑧	同上	親しくない同級生——同級生

注：中国人日本語学習者は本来の身分—留学生として登場する

- ③ **願望**：やりたいという気持ちを表す
 「手伝いたいんですが」——JJ
 「私もできれば参加したいと思うんですが」——CJ-上級
 「我是很想帮你忙的」(とても手伝いたいんだけど)——CC
- ④ **わび・残念な気持ち**
 「申し訳ないんですけど、今レポートとか宿題とかちょっと重なってて」——JJ
 「レポートもたくさんありますから、本当にすみません」——CJ-中級
 「不好意思，你看是不是再去找其他的人」(申し訳ないけど、他の人を探してもらえ)——CC
- ⑤ **弁明**：言い訳や弁明によって相手の意向に添えないことを自分の責任にしないようにすることであり、実質的には「断り」を意味する
 「ちょっと最近忙しいんで」——JJ
 「でも、私、新しいバイトを始めたんですよ」——CJ-中級
 「我現在正在外面打工，每天都要去」(私は今アルバイトをしていて、毎日行かないといけない)——CC
- ⑥ **代案**
 ・**積極的** (commitment)：自分ができない代わりに、具体的な方法を提示したり、他の人を紹介したりする
 「私より日本語の上手な人がいるから紹介してあげましょうか」——CJ-中級
 「我給你介紹一個我的朋友吧」(私の友達を紹介しましょうか)——CC
 ・**消極的** (no commitment)：具体的な方法を提示しない
 「他の人にあたって」——JJ
 「誰か暇な人に頼んだら」——CJ-中級
 「你看能不能找其他的同学」(他の人を探してみても)——CC
- ⑦ **条件提示**
 ・将来や過去になら承知したという旨の表明
 「もうちょっと前に言ってくれたらよかったんだけど」——JJ
 「今の時期を除いたら、あのう手伝いたいんですけど」——CJ-上級
 「要是過一段時間，我再看看有没有時間來帮你」——CC
 (少し待っててくれれば、手伝いに行けるかも

- しれません)
 ・具体的な条件を提示し、積極的に取り組もうとする姿勢を表す
 「全部出れるわけじゃない、出れるときだけでいいですか」——JJ
 「できれば、誰かと分担で、やってもいいんですけど」——CJ-上級
- ⑧ **回避**：ダイレクトに話すことを避ける
 ・延期
 「ちょっと、考えさせてもらえますか」——JJ
 ・省略
 「本当は皆さんと一緒にやりたいんですけど、ちょっとですわね…」⁹⁾——CJ-上級
 「今すごく忙しいんで、できれば…」——JJ
 ・一部繰り返し
 (Aの発話「全部で30頁ぐらいですけど」に対して)
 「30頁啊！」(30ページ!)——CC
 ・言葉を濁す
 「本当に分からないですよ」——CJ-中級

III 付随表現：断りとして機能しない付随的な発言

- ⑨ **情報要求、一部繰り返し、確認など**
 「どのぐらい時間がかかりそうですかね」——JJ
 「ああ、はい、でも、いつですか」——CJ-中級
 (Aの発話「2週間以内で完成したいけど」に対して)
 「2週間」⁹⁾——JJ
- ⑩ **思いやり発話**
 ・好意的反応 「あ、面白いですね」——CJ-上級
 ・感謝 「お声をかけていただいてうれしいんですけど」——JJ
 ・関係維持 「下次有機會帮你」——CC
 (今度チャンスがあったら、手伝うよ)
- ⑪ **ためらいの表出**
 「どうしようかな」——CJ-上級
- ⑫ **相手の共感に訴える**
 「だって、勉強とアルバイトの両立は難しいでしょう」——CJ-中級

注：JJ=日本語母語話者

CJ-上級=中国人日本語学習者上級

CJ-中級=中国人日本語学習者中級

CC=中国語母語話者

本研究では①個々の意味公式の発現頻度 ②意味公式の

使用順序の頻度 ③意味公式の内容をもって分析を行う。

例えば、次のような発話

「ちょっと申し訳ないですけど、今忙しい状況なので、
 {わび} {弁明}
できればお断りしたいんですけど。——(先生・疎) JJ
 {直接的な断り (不可)}

の場合、JJが疎の先生に断るとき、「わび」「弁明」「不可」の三つの意味公式をそれぞれ一回使用したと数える。意味公式の使用順序は「わび+弁明+不可」とする(但し、使用順序の頻度を出す時は先頭の2公式のみを見るので、これは「わび+弁明」のカテゴリーに分類される(3章で詳述)。

3. 結果と考察

3.1 全体像

今回のロール・プレイの結果を「断り」の回数という観点から見ると次の3つに分類できる。表3.1は、JJ, CJ, CCの「断り」の全体的分布である。

① 一度も断らなかった場合。これは、依頼されて引き受けてしまった場合で、分析の対象から外す。——断り失敗

例(1)のような「断り失敗」はCJ-中級に一番多かった(表3.1を参照)。

(1) (先生・疎) CJ-中級

A 1: Bさん、ガイドブックの中国語訳やってくれますか。

B 1: 大丈夫だと思います。

A 2: じゃあ、よろしく頼むよ

B 2: はい、がんばります。

② 断りが1度出た場合。これには2つのパターンがある。

a. 依頼されて断る ——断り I のみ

(2) (先輩・疎) CJ-上級

A 1: 学園祭、Bさんにも参加してもらいたいですけれども

B 1: うん、参加したいんですけど、ちょっと忙し

くて、できないかもしれないけど、ごめんなさい。

A 2: そうですか、じゃ、何かあったら、また。

B 2: はい。

b. 依頼されて一度は断るが、食い下がられて引き受ける——断り I +断り失敗

(3) (先生・親) CJ-中級

A 1: ガイドブックの中国語の訳をつけてほしいと思ったんですけど、

B 1: 中国語の訳ですか、そういうことですか。あ、ええと、僕の中国語力はまあ、しゃべれるはしゃべれるんだけど、まあ、あまりうまくはないと思うんだけど、え、それ、それは、まあ、できないと思うんです。専門語ですよ。

{断り I}

A 2: ううん、

B 2: 専門用語ですよ、ほとんどは。

A 3: あ、そんなことはない。

B 3: そうですか、じゃあ、どういうふうですか。

A 4: 日常的な説明とかそういう程度だから。

B 4: あ、そうですか、ええ、

A 5: どう?

B 5: じゃあ、専門用語がなければ、頑張ってやりましょうか。 {断り失敗}

③ 一つのロール・プレイに2度断りが現れた場合。依頼されて断るが、食い下がられ、もう一回断る ——断り I +断り II

(4) (先生・疎) JJ

A 1: 中国語訳をやってもらいたいけど、都合の方はどうかな?

B 1: あのう、最近ちょっと宿題とかレポートとかが多たまって、ええと、アルバイトの方もちょっとやってるので、できればお断りしたいけど。 {断り I}

A 2: でも、君ぐらい熱心で、2年間留学したこともあるし、30ページ長いけど、

どうにかならないかな。

B 2: 単位のほうが心配なんで、できれば、他の人に当たってほしいんですけど。

A 3: 熱心なのに、残念だな。

B 3: すみません。 {断り II}

CJ-中級の方が「断り失敗」(9/80)、「断り I +断り失敗」(8/80)が一番多く、学習者にとって「断り」の難しさ、「断りたいけど、どう断ればいいのか分からないから、どうしても引き受けてしまう」というような原因が考えられる。

会話が断り II の段階まで展開するかどうかは、依頼側の

表3.1 「断り」の全体像

	JJ	CJ-上級	CJ-中級	CC
①断り失敗	3/80	3/80	9/80	3/80
② a.断り I のみ	32/80	41/80	27/80	38/80
b.断り I +断り失敗	3/80	4/80	8/80	4/80
③断り I +断り II	42/80	32/80	36/80	35/80

注: * 発見数/総数

*断り I は断りの意味公式(付随表現を除く)が入っている最初のターンまでを指す。

*断り II は断り I から会話終了までを指す。

表3.2 断り I における主な意味公式の頻度

	JJ				CJ-上級				CJ-中級				CC			
	上親 (18)	上疎 (19)	同親 (20)	同疎 (20)	上親 (17)	上疎 (20)	同親 (20)	同疎 (20)	上親 (16)	上疎 (18)	同親 (18)	同疎 (19)	上親 (19)	上疎 (19)	同親 (19)	同疎 (20)
I 直接	6%	16%	10%	5%	18%	30%	15%	30%	13%	6%	17%	26%	11%	26%	16%	35%
II 間接																
願望	17%	5%	15%	5%	12%	25%	25%	20%	38%	28%	17%	16%	16%	11%	5%	15%
わび	11%	21%	10%	25%	12%	30%	10%	15%	6%	11%	6%	16%	5%	16%	16%	30%
弁明	83%	95%	90%	100%	94%	90%	100%	100%	94%	100%	100%	95%	95%	100%	84%	90%
代案	11%	16%	0%	25%	12%	10%	5%	10%	19%	17%	6%	16%	26%	47%	11%	25%
条件提示	33%	21%	15%	20%	6%	15%	10%	20%	19%	6%	11%	11%	21%	21%	21%	5%
回避	17%	26%	25%	20%	24%	10%	20%	25%	31%	28%	28%	11%	11%	5%	5%	0%

注：* () 20のロール・プレイ中断り I の総数
 * JJ=日本語母語話者 CJ=中国人日本語学習者 CC=中国語母語話者
 * 「上親」=親しい先生/先輩 「上疎」 =親しくない先生/先輩
 * 「同親」=親しい友達/同級生 「同疎」=親しくない友達/同級生
 * %=発現数÷(20のロール・プレイ中)断り I の総数

個人差に関わっている。依頼側による違いを省くために、断り I と断り II を分けて分析することにした。本研究では文面の制限のため、数の一番多い断り I のみを分析考察する。

3.2 「上下関係」と「親疎関係」

3.2.1 意味公式の発現頻度から見た結果

この節と次節では、断り I で発現した意味公式の頻度と意味公式の使用順序における各戦略の頻度を用いて、日本人は「上下」、中国人は「親疎」で戦略を選ぶという考察が今回の調査で支持しているかどうか、学習者にプラグマティック・トランスファーがあるかどうかを分析する。

2.3で述べた意味公式の分類を用いて、各公式のパーセンテージを出した。表3.2は断り I で発現した意味公式の頻度である¹⁰⁾。

以下表3.2で挙げている主な意味公式の頻度を個別的に分析し、考察していく。なお、プラグマティック・トランスファーは、学習者が母語の発話行為の知識を目標言語に転移することであるから、CJの「断り」における意味公式

の発現の仕方が、CCのそれと似て、JJのそれと異なるとき、プラグマティック・トランスファーが存在すると判断した。

直接的な断り (不可)

図1で表しているように、全体的に見れば、CJとCCの「直接的な断り」の使用率がJJより高い。JJの場合は、疎の相手に断る際、図1で表しているように「上下」によって戦略の選択をしている。

- (5) JJ (先生・疎)
 ちょっと、最近忙しいんで、できれば遠慮したいけど {不可}
- (6) JJ (同・疎)
 サークルですね、今ちょっと忙しいんですけど {弁明}

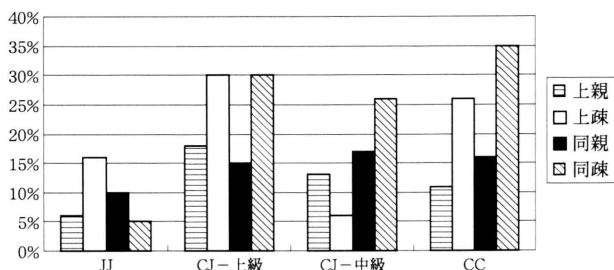
JJは、例(5)のように親しくない先生には「不可」で、例(6)のように同等の親しくない人には「弁明」で断っている。

しかし、親しい人に断る時「上下」による大きな違いが見られなかった(上親6%：同親10%)。「上親」(6%)と「上疎」(16%)に違いが見られ、「親疎」がより重要視され、目上の親しい相手には「不可」が使いにくいと見える。従って、「直接的な断り」に関しては、一概にJJが「上下」で戦略を選択しているとは言えないと思われる。

CCの場合は、図1で分かるように、あきらかに「親疎」によって戦略が異なっている。

- (7) CC (先輩・疎)
 A：校慶想讓你帮忙一下。(学園祭を手伝ってほしいけど)
 B：是嗎，我現在很忙的。可能帮不了你的忙。
 (そうですか、今忙しいので、多分お手伝いできないと思います) {不可}
- (8) CC (7と同一被験者) (先輩・親)

図1 直接的な断り



A: 明天開始的話, 你有時間嗎? (明日から始めるんだったら, 時間ありますか)

B: 明天開始啊。每天要上英語班。完了以後打工。然後行是行, 但是会很晚。很晚回来以後才可以的。(明日ですか。毎日英語のクラス, その後, バイトに行っているの。いいのはいいけど, 遅くなると思うよ。帰った後からになるけど)

{弁明}

(7)と(8)は, 同一被験者 CC が親しくない先輩と親しい先輩に対する「断り」である。前者は事情説明を詳しくせず直接的に断っている。これに対して, 後者は詳しく事情を説明している。

(9) CC (同・疎)

A: 有件事想請你帮忙。(手伝ってほしいことがありますけど)

B: 最近恐怕不行, 要準備考試, 挺忙的, 沒有時間。(今は多分だめです。試験の準備があるので, 忙しい, 時間がない) {不可}

(10) CC (9と同一被験者) (同・親)

A: 一点点小事嘛。(ちょっとしたことよ)

B: 一点点小事! 你看我又上英語進修班, 又打工, 真是挺忙的。

(ちょっとしたこと! ほら, 私, 英語のクラスにも参加しているし, バイトもしているし, 本当に忙しいのよ) {弁明}

(9)と(10)は同年輩の親しくない人と親しい人に断っている。ここも(7), (8)と同じような特徴が表されている。一方, 上下関係が違う(7)と(9), (8)と(10)には, それぞれ大きな差が見られない。CCは「親」の相手より「疎」の相手に「直接的な断り」を多く使用している(図1を参照)。

CJ-上級は図1で表しているように, CCと同様に「親疎」によるストラテジーの相違が大きい。表3.3で示しているように, 「同親」と「同疎」に対する「直接的断り」はCCと極めて似て, JJと異なるため, 母語のプラグマティック・トランスファーと判断できる。

(11)と(12), (13)と(14)は, それぞれ同一の被験者が親しくない相手と親しい相手に断る際, 異なるストラテジーを用いた例である。

(11) CJ-上級 (先生・疎)

A: Bさんにお手伝いしてもらえないかと思いでして, どうでしょう。

B: 今の時期を除いたら, あの, あの手伝いしたいんですけど, 今の時期はちょっと, もう受験で忙しいんで, ちょっと, ちょっと無理かなと思いますけど。{不可}

(12) CJ-上級 (11と同一被験者) (先生・親)

A: 中国語訳をB君に, どうか?

B: まあ, 簡単どころがいいですけど, 難しいところができるか, ちょっと自信がないですね。

{弁明}

(13) CJ-上級 (同・疎)

A: 金曜はどう?

B: 今度の金曜はちょっと, ちょっと用事があって, ちょっとできないかなー {不可}

(14) CJ-上級 (13と同一被験者) (同・親)

A: 今度の日曜あたりどうですか?

B: 日曜あたりはちょっとほかの用事が入っていて, {弁明}

CJ-上級の「直接的な断り」の使用率がJJより高いので, 目上の相手(特に親しい目上の相手)には失礼と思われるだろう。

CJ-中級の「直接的な断り」の頻度においては, 「上親」と「上疎」で違いが見られたが, CCのパターンとは逆であるため, CCの影響は見られなかった。「上疎」と「同疎」の差は大きい, JJのパターンとは逆であるため, CJ-中級はCCともJJとも似ていない。但し, 表3.4で示している数字で表しているように, 「同親」と「同疎」に対する「直接的な断り」の頻度の高さから見れば, CJ-中級もCCに近い。

今回の調査のデータから, CJ-上級も, CJ-中級も, 目上の親しい人に断るときも同等の親しい人に断る時と同じくらいの高い頻度で「直接的な断り」をしていることが分かった。Brown & Levinson (1987) の「丁寧さのルール」によれば, 「直接的な断り」は「bald-on-record」の方略に当たる。これは, FTA全体の重さがとても小さいと判断する際(例えば, よく知っていてしかも自分に対して何の力をふるうこともないような相手に, 些細な頼み事をするときなど), 或いは, 力の強い方が弱い方に発話するときによ

表3.3 CJ-上級の「直接的な断り」

	上親	上疎	同親	同疎
CC	11%	26%	16%	35%
CJ-上級	18%	30%	15%	30%
JJ	6%	16%	10%	5%

表3.4 CJ-中級の「直接的な断り」

	上親	上疎	同親	同疎
CC	11%	26%	16%	35%
CJ-中級	13%	6%	17%	26%
JJ	6%	16%	10%	5%

く用いられると述べられている。「断り」自体がFTAの重い行動であり、さらに目上の相手に対する発話であるため、学習者の行動がこのルールに反していることが見て取れる。

CJは目上の親しい人を同等の親しい人と同一視しているに見えるが、目上の相手には、ストレート過ぎて、適切とは思えない行為である。親しい先生に対するCJ, JJの断りの例を見てみよう。

(15) CJ-中級

夏休なる前、レポートいっぱい出さなくてはならないですよ、それで、私バイトもやっているし、たぶんちょっと無理かと思いますよ。 {不可}

(16) CJ-上級

学校の勉強でなんかちょっと精一杯な感じで、今回ちょっと無理かもしれません。 {不可}

(17) JJ

ちょっと今、忙しくて、あのう、アルバイトが毎日入ってて、その上、あのう、レポートも締め切りが今度の水曜日なんです。それで、ちょっと、まあ、まず見てから、それ難しくなかったら、できると思いますけど、まず、ちょっと、考えさせてもらえますか。 {弁明}+ {回避/延期}

例(17)のように、目上の人に対して、JJは詳しく説明をし、さらに「延期」という方略で断っている。学習者は例(15)、(16)のように、単刀直入に断っている。

学習者にもう一つ目立つ傾向は例(15)、(16)でも現れている「無理」の多用である。JJ(2回)より、CJ-上級(14回)、CJ-中級(10回)の方が断然多い。表3.5は実際に使われていた「直接的な断り」の内容である。

JJの「直接的な断り」の例をみてみよう。

(18) (先生・疎/2回) (先生・親)

できればお断りしたいんですけど。

(19) (先輩・疎)

できれば遠慮したいけど

(20) (同・親)

今すぐはできないけど。

(21) (同・親) (同・疎)

なんか最近無理っぽくて

例(18)~(21)で示しているように、JJは相手によって、特に「上下」の違いで、「直接的な断り」の内容を変えている。目上の相手には、例(18)、(19)のように「お断りしたい」「遠慮し

表3.5 「直接的な断り」の内容

	できない	無理	お断りしたい	遠慮したい
CJ-中級	2	10	0	0
CJ-上級	2	14	0	0
JJ	1	2	3	1

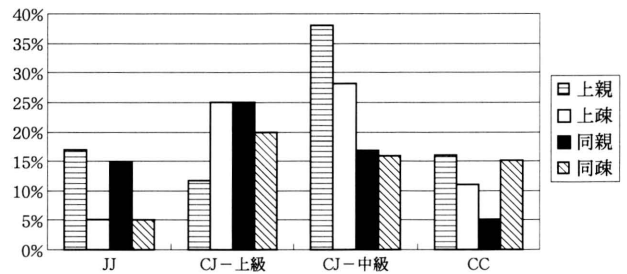
たい」を使用し、距離感と丁寧さを同時に表している。同年輩の相手には、「できない」「無理」を用いている。

JJと比べ、CJは「上下」に関係なく、均一的な表現を使用し、目上の相手にも「無理」を多用しているが、これは妥当ではないだろう。

間接的な断り

「願望」

図2 間接的な断り「願望」



「願望」は、他の意味公式と一緒に用いられるケースが多い。そのほとんどが逆接の「が」「けど」と一緒に用いられるため(例えば、「お手伝いしたいのは山々なんですが」「手伝ってあげたいけど」など)、それ自体が断る意思を暗示している。

JJの「願望」の使用は図2で分かるように「上下」の差があまりなく、「親疎」で大きく異なり 親しい相手により多く「願望」を使用している。

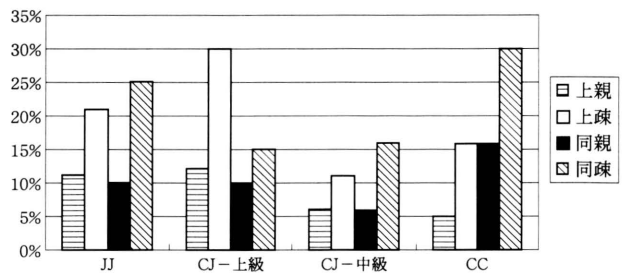
CCは「同親」と「同疎」の間で「親疎」の相違が見られたが、「上親」と「上疎」には大きな違いがなかった。また「上親」と「同疎」は「上下」の違いを反映している。

CJはCCのパターンとも、JJのパターンとも異なり、全体的に「願望」の使用率が高い。

「願望」は話者の熱意を積極的に提示し、ポジティブ・ボライタネスのストラテジーに当たる。特に、CJ-中級の多くが、目上の相手にこれを選択しているため(上親38%、上疎28%)、依頼される場合に、積極的に会話に参加する態度が窺える。

「わび」

図3 間接的な断り「わび」



「わび」においては(図3)、JJは「親疎」でストラテジーを選ぶことが結果に反映し、目上と同等の疎の相手に「わ

び」を多く使用している。

CCは、「上疎」に一番多く「わび」を用い、選択基準ははっきりしていない。

「丁寧さのルール」(Brown & Levinson 1987)の中で、「わび」は、自分がこれから行おうとする「断り」行為によって相手の面子(Face)を脅かすことを軽減するために用いるネガティブ・ポライトネスを保つ方略であると指摘している。このネガティブ・ポライトネスのストラテジーは、疎の相手に使用されるとき一種の社交辞令として働き、距離を置きながらも失礼にならないように、という配慮があるものと見える。(22)と(23)はそれぞれJJとCCの「わび」の例である。

(22) JJ (先生・疎)

ちょっと忙しくて、他に手はなせない状況なんですけど、とても申し訳ないんですけど

(23) CC (同・疎)

真是对不起。恐怕没有时间了。

(本当にすみません、たぶん時間がないと思います)

目上の人に対して、JJ(「上親」+「上疎」=32%)のほうがCC(「上親」+「上疎」=21%)より多くの「わび」を用いていることが分かった。

CJ-中級に「わび」の発現が一番少なく、目上の相手に対しては、CCのパターンと近似している。CJ-中級の「わび」使用の少なさによって、談話がきつく感じられるおそれがあるだろう。CJ-上級にははっきりしたパターンが見られなかった。

「弁明」

図4 間接的な断り「弁明」

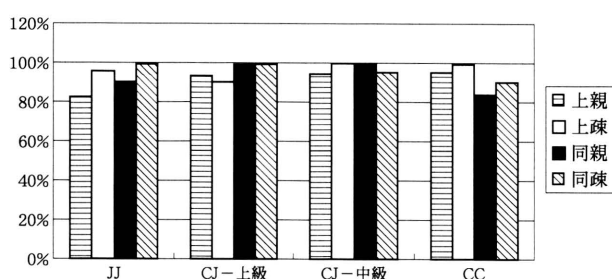


図4で表しているように、JJ, CJ, CCともに「弁明」を多く使用し、はっきりした傾向が見られなかった。弁明の

内容に「上下」「親疎」による違いがあるかどうかを見るために、「忙しいなどのぼかし表現」と「具体的に理由を述べる」の2項目に分け、次の表3.6にまとめた。

JJは同等の人と目上の親しくない人に「忙しいなどのぼかし表現」を多く用いている。特に同等の親しくない人に一番高い比率でこの弁明方略を使用している(80%) (例24)。目上の親しい人には積極的に事情を説明するなど「具体的に理由を述べる」(94%) (例26)、目上の親しくない相手(例25)と同等の人にはぼかし表現を用いる傾向がある。「上下」と「親疎」の優位順がはっきりしていない。

(24) JJ (同・疎)

今、すごい、めちゃくちゃ忙しいんですよ。

(25) JJ (先輩・疎)

ちょっと、最近忙しいんで、できれば遠慮したいんですけど。

(26) JJ (先生・親)

絶対手伝いたいと思うんですけど、そうですね、最近なんか知らないけど、忙しいですよ。なんか宿題とかレポートとかもあって、ちょっとへとへとというところがあってですね。

CCにおいては、JJのような極端な現象は見られなかった。どの関係でも、「具体的に理由を述べる」方が「ぼかし表現」よりやや多い傾向にあった。

CJ-上級とCJ-中級の弁明の内容は似ている。いずれの場合も目上の親しくない人に「具体的に理由を述べる」という方略を使う頻度が高い(上級89%, 中級95%)。全体的にはCJは「具体的に理由を述べる」方略がJJのそれより高い比率で用いられている。親しくない人には、言い訳のように感じられる恐れがあるだろう。日本語で書かれた場面設定の中の「断り」の前提理由をそのまま使った学習者がいたが、その影響で、CJがCCとJJより多く「具体的に理由を述べる」方を用いたとも考えられる。また、CCの影響を受けている可能性もある。

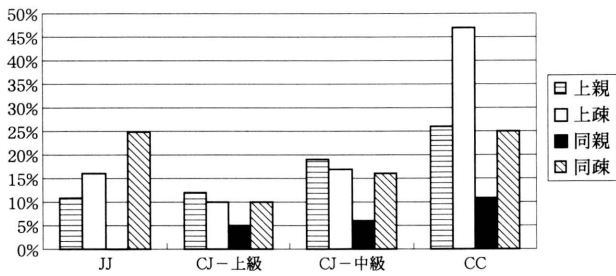
表3.6 断りIにおける「弁明」

	JJ (%)				CJ-上級 (%)				CJ-中級 (%)				CC (%)			
	上親	上疎	同親	同疎	上親	上疎	同親	同疎	上親	上疎	同親	同疎	上親	上疎	同親	同疎
ぼかし表現	6	50	50	80	18	11	30	70	20	5	22	33	38	47	43	37
具体的な理由	94	50	50	20	72	89	70	30	80	95	78	67	62	53	56	63

注: %=発現数 ÷ (20のロール・プレイ中)「弁明」の総数

「代案」

図5 間接的な断り「代案」



注：JJの「同親」は0%のため図に現れていない。

図5は「代案」の各関係での頻度である。JJは同等の親しい人(0%)より目上の親しい人(11%)に、この意味公式を用い、「上下」の相違を表している。例(27)のように、JJは目上の親しい先生に「代案」を提示している。

(27) JJ (先生・親)

最近ちょっと宿題とか、バイトとかで忙しくて、忙しいんですよ。もし他に出来る人がいないんですしたら、やりますけど、ちょっと他の人に当たってもらえませんかでしょうか。

これに対して、「同親」(0%)と「同疎」(25%)では「親疎」の違が見られ、「親疎」をより重要視する傾向にある。

(28) JJ (同・疎)

A: ガイドブックの翻訳をしてもらいたいですけど。
 B: ちょっとあのう、僕のほうも今、忙しいんで、ちょっと、ほかの人に当たって。

(29) JJ (同・親)

A: 翻訳してほしいけど、どう、今の時期。
 B: ううん、めっちゃ手伝いたんだけどさ、なんかちょっと最近無理っぽくて、
 A: 無理、
 B: 忙しくしてるちゃ、最近。宿題とかレポートとかも多いけど、私バイト始めちゃって、あれ忙しいよね、すごい。

例(28)のようにJJは、親しくない人には話がコンパクトになりがちであり、早くしかも失礼にならないように断ろうとしている。親しい人には例(29)のように「直接的な断り」の後、具体的に理由を述べて納得させようとしている。

断りIでの「代案」は断然にCCの方が多。CCは目上の親しい人(26%)と親しくない人(47%)で、「代案」の頻度が違っている。例(30)はCCの親しくない先生への「代案」の使用例である。

(30) CC (先生・疎)

我考慮考慮，如果我去不了的話，我再給你介紹一個人。

(ちょっと考えさせてください。私が行けなかったら、他の人を紹介しますので。)

ここでは、JJの「上親」と「同親」，「同親」と「同疎」の「代案」の使用率が異なり、それぞれ、「上下」，「親疎」によるストラテジーの相違を表している。

CCの「上親」と「上疎」，「上疎」と「同疎」には、それぞれ「親疎」，「上下」による相違が観察された。

中国語母語話者の「代案」の使用について、Chenら(1995)では、「代案」は直接的な衝突を避ける方法であり、断る側が相手のニーズを考えて、提案することによって、自分の誠意を表すことも、相手の面子を保つこともでき、また「断り」の相手の面目を脅かす力(threatening power)を和らげてくれる、というように述べている。CCの被験者から、「中国人は人間関係を大事にするから提案をする」，「親しい人には他の人を探すなどの手を尽くすが、親しくない人には「推託」(うまく逃げる)」という感想があった。CCは、ここで「積極的な代案」(他人を紹介するなど)を強調している。そこで、「代案」の中でも貢献度の異なる2種類 ①「積極的」②「消極的」(2.3を参照)に分けることができた。

①は相手の事情に配慮を示し、いい方法を提示することによって、相手に協力しようという積極的な姿勢の表明であり、相手との距離を縮めるポジティブ・ポライトネスのストラテジーである。②は自分が問題を回避するための方略という消極的な面を持つ。

JJ, CJ, CCがそれぞれどのようにこの二つを使い分けているのかを見ていくために、表3.7のようにそれぞれの「代案」を①と②で分類した。

JJはほとんど「消極的な代案」を用い、相手への強制を避ける傾向にある。これに対して、CCは両方を平均的に用いている。次の(31)と(32)は、CCが「積極的な代案」と「消極的な代案」を使用する例である。

(31) 「積極的」 CC (先生・親)

最近我实在是太忙了。不過，我可以找一位朋友帮你。(最近は本当忙しいです。但し、友達を紹介することはできます。)

(32) 「消極的」 CC (先輩・疎)

學習太忙了。找別人好嗎。我是顧不上來。

表3.7 断りIにおける「代案」

	JJ	CJ-上級	CJ-中級	CC
①積極的	2回	5回	6回	9回
②消極的	8回	2回	4回	11回

(勉強がとても忙しくて。他の人探して、私はちょっと無理)

図5ではCJははっきりした傾向が見られなかったが、表3.7で現しているように「積極的な代案」がJJより多い点においては、CCに類似している(例33, 34)。

(33) 「積極的」CJ-中級(同・疎)

私より日本語の上手な人がいるから、紹介してあげましょうか。

(34) 「積極的」CJ-上級(同・疎)

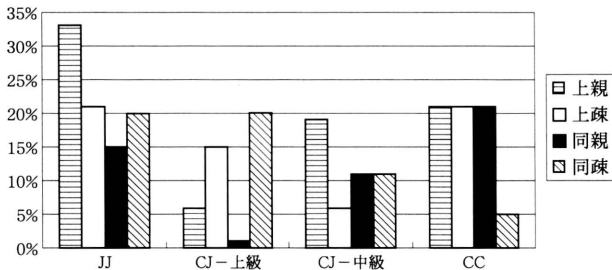
そうしたら、友達とかに聞いてみますので。

例(31), (33), (34)で表しているように、CCもCJも「積極的な代案」を好む傾向が見られ、相手へ積極的に働きかけている。しかし、これは日本語言語環境に必ずしも適用できることではない。これが多すぎると、やかましいとか失礼と思われることもあるだろう。さらに、例(33)のような不適切な言語形式によって行われた場合には、より違和感が感じられる可能性がある。「紹介してあげましょう」はCJに何回も現れていたが、この表現は上から下へ何かを施すニュアンスがあり、丁寧度が低いとされている。

「条件提示」

図6で表しているように、JJはCC、CJより「条件提示」を多く使用している。これは例(35)のように、目上の親しい人(33%)に一番多く使われており、同年輩の親しい相手(15%)には一番少ない。

図6 間接的な断り「条件提示」



(35) JJ(先輩・親)

- ・時々アルバイトとかで抜けてもいいんですけど。
- ・二人で分担でやってもいいんですけど。

CCは、「同親」(21%)と「同疎」(5%),「上疎」(21%)と「同疎」(5%)の間に、それぞれ「条件提示」の使用率が異なっているが、「親疎」と「上下」の優位順ははっきりしていない。

(36) CC(同・親)

要是在過去吧，就是我還沒準備論文之前，你看你的那些事情都沒問題。都可以帮你的。(もっと前に言ってくれたらなあ。論文を書く前だったら、何も問題なかったんですけど)

CCは、例(36)のような「条件提示」を、同等の親しい相手及び目上の親しくない相手には比較的多く用いているが、同等の親しくない相手には少ない。

CJ-上級の目上の親しい人(6%),同等の親しい人(10%)とCJ-中級の目上の親しくない人に(6%)用いた「条件提示」がJJと比べかなり低い。

例(35)と(36)のような「条件提示」の内容の違いから、これを更に次のように2分類することができる(2,3意味公式の分類を参照)。

①将来や過去なら承知したという旨の表明(例36)

②具体的な条件を提示し、積極的に取り組もうとする姿勢を表す(例35)

表3.8で示しているように、JJは目上の相手に「条件提示」を多く使用し、ほとんどは②を選択している。「代案」と違い、「条件提示」においては、JJはポジティブ・ポリトネスのストラテジーを好んでいる。「積極的な条件提示」はLeech(1983)で示唆している協調のための「丁寧さのルール」の一つすなわち「気配り」にも当たると考えられる。JJは積極的な条件提示によって、「断り」というFTA行為で不均衡になったあるいはなりそうな相手との関係を修復していると見える。

CCは親しくない人に①を用い、親しい人にはほとんど②を選択し、「親疎」による違いが観察されたが、CJに与える影響が見られなかった。

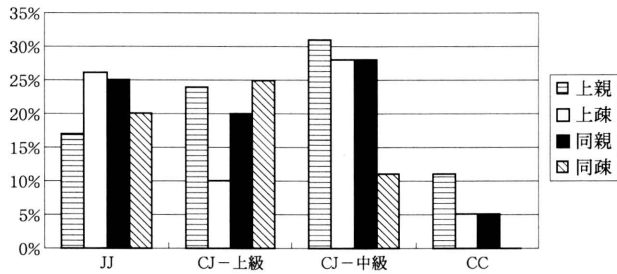
CJ-中級はJJと類似し、②の方略を選択し、積極的に相手に働きかける姿勢を表しているが、CJ-上級とともに目上の相手に「条件提示」の使用率が低いため、「気配り」が足りなく、十分に関係修復したと感じられないおそれがある。

表3.8 断りIにおける「条件提示」

	JJ				CJ-上級				CJ-中級				CC			
	上親	上疎	同親	同疎	上親	上疎	同親	同疎	上親	上疎	同親	同疎	上親	上疎	同親	同疎
①	0	0	1	0	1	2	1	1	0	0	0	0	1	4	1	1
②	6	4	2	4	0	1	1	3	3	1	2	2	3	0	3	0

「回避」

図7 間接的な断り「回避」



注：CCの「同疎」が0%のため、図に現れていない。

「断り」の緊張感を避けるもう一つの手段として考えられるのは、断る場面を回避する方略である。「回避」には延期(「考えさせてください」)、省略(「ちょっと…」)、言葉を濁す(「どうかな」)などが含まれている。

JJの「上疎」(例37)と「同親」(例38)に「回避」が一番多く観察された。「上下」の違いは明らかではない。

(37) JJ (先生・疎) 26%
今ちょっと忙しいですよ。やれるかどうか、ちょっと…

(38) JJ (同・親) 25%
ちょっと疲れててね、どうかなと思うけど。

JJの「上親」には「回避」が一番少なく17%となっている。「回避」の中の「延期」は、取りあえず答えを保留することでその場を逃げようとする消極的な方法となり、場合によっては不誠実な印象も与えかねないことや、「どうかな」「わからない」「ちょっと」などの表現も目上の親しい人には使いにくいことが原因で、「上親」の「回避」の使用率が低いのだろう。

CCは全体的に「回避」が少なかったため、「上下」「親疎」の違いがはっきりしていない。

目上の親しい相手に対して、CJ-中級(31%)が高い頻度で「回避」を選択している。特に例(39)(40)のように、「ちょっと…」で終わる表現が多い。

(39) CJ-中級 (上・親)
アルバイトがありますが、ちょっと…

(40) CJ-上級 (上・親)
自分も今年生なんで、ちょっと…

CJ-上級の「上親」(24%)と「上疎」(10%)、CJ-中級の「同親」(28%)と「同疎」(11%)に対する「回避」の使用率は、CCよりも「親疎」の相違を数字ではっきり反映しているが、トランスファーは観察されなかった。

JJの方がCCより断然多くこの意味公式を用いている。このことは日本語の曖昧さの一面を裏付けている。しかし、目上の親しい人に対して、CJ-上級、CJ-中級がともにJJよりも「回避」を多用している。日本語の曖昧さをステレ

オタイプ的に意識し、過剰使用しているのかもしれない。インタビューでは、CJが「日本人は曖昧な表現を好んでるので、日本人と話しているときは、はっきり言わないようにしている」と話していた。しかし、日本人同士の「曖昧さ」は、共通の言語環境を持った上で、言葉に出さなくても暗黙のうちに理解し合う「察し」の文化である。留学生の「曖昧さ」は、単に「何をいいたいのか、さっぱり分からない」というような印象を母語話者に与えかねない。以上、断りIで選択された主な意味公式の特徴を見てきた。まとめると次のような結果になる。

イ) 日本語母語話者が「上下」によって戦略を選択している傾向が見られたのは4ヶ所で、「親疎」によって戦略を選択している傾向が見られたのは6ヶ所である。ここでは、日本人が「上下」で戦略を選択していると言えないことが分かった。その他、JJは「わび」「消極的な代案」「積極的な条件提示」を選択する傾向がみてとれた。CC、CJと比べ、JJはよりネガティブ・ポライトネスの戦略を好む傾向にある。

ロ) 中国語母語話者が「親疎」によって戦略を選択している傾向が見られたのは6ヶ所で、「上下」によって戦略を選択している傾向が見られたのは2ヶ所である。

ハ) CJ-上級の学習者にプラグマティック・トランスファー(親疎による転移)が見られたのは、直接的な断り(「同親」と「同疎」)の一ヶ所である。中級の学習者には親疎による転移が見られず、間接的な断りの中の「わび」(目上の人に対する)の頻度の低さがCCと似、JJと異なるため、トランスファーの一つと判断できる。また、CJが「具体的に理由を言う」、「積極的な代案」を提示するなどの方略を好む傾向がCCと類似している。CJ、CCはポジティブ・ポライトネスの戦略をJJより多く選択していることが分かった。上級の学習者も中級の学習者も親しい目上の人に対して断るとき、親しい同等の人に断る時と同じぐらいの頻度で直接的な断りを示している。しかし、これでは、目上の人には、ストレート過ぎて、失礼に思われる恐れがある。

3.2.2 意味公式の使用順序における

各戦略の頻度から見た結果

前節では個々の意味公式の頻度の特徴を見てきた。ここでは、「弁明」「わび」「不可」「代案」などの意味公式がどのような順番、どのような分配で発話の中で用いられているのかを知るために、意味公式の順序からCC、CJ、JJの特徴を見る。

表3.9は断りIで発現した主な戦略の頻度であ

表3.9 意味公式の使用順序における各ストラテジーの頻度 (断り I)

	JJ				CJ-上級				CJ-中級				CC			
	上親 (18)	上疎 (19)	同親 (20)	同疎 (20)	上親 (17)	上疎 (20)	同親 (20)	同疎 (20)	上親 (16)	上疎 (18)	同親 (18)	同疎 (19)	上親 (19)	上疎 (19)	同親 (19)	同疎 (20)
弁明のみ	28%	16%	40%	35%	47%	35%	60%	30%	31%	39%	39%	42%	37%	32%	37%	20%
弁明+不可	6%	11%	5%	0%	12%	15%	10%	25%	13%	0%	17%	16%	0%	16%	11%	15%
弁明+代案	6%	11%	0%	10%	6%	10%	5%	5%	13%	11%	6%	5%	21%	16%	5%	20%
不可+弁明	0%	0%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	0%	5%	5%	11%	0%	25%
不可のみ	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%
わび+弁明	1%	11%	10%	15%	6%	5%	0%	0%	0%	6%	0%	5%	0%	5%	5%	15%
弁明+わび	0%	11%	0%	10%	0%	10%	5%	5%	6%	6%	0%	5%	5%	5%	11%	0%
弁明+条件	22%	16%	5%	15%	0%	15%	0%	20%	13%	6%	11%	11%	11%	5%	5%	0%
弁明+回避	11%	16%	25%	15%	18%	5%	15%	15%	19%	22%	17%	5%	11%	0%	5%	0%
その他	17%	11%	10%	0%	6%	5%	0%	0%	6%	0%	0%	5%	11%	5%	21%	5%

注：*% = 発現数 ÷ (20ロールプレイ中) 断り I の総数 *「条件」=「条件提示」

る。ここでは、意味公式が2つ以上含まれている場合、先頭の二つを取り、数え上げている。例えば、「弁明+不可+謝罪」の場合、「弁明+不可」先行型に分類する。

JJの場合、「上下」でストラテジーを選択することが数量的に反映しているのは次の項目である。親の相手(「上親」と「同親」)には、四つのストラテジー(「弁明+代案」「不可+弁明」「弁明+条件」「弁明+回避」)で「上下」による違いが見られた。一方、疎の相手(「上疎」と「同疎」)に見られたのは、「弁明のみ」「弁明+不可」の2項目である。

ここでは、目上の親しい人と同等の親しい人には差があるが、親しくない相手に対して「上下」によるストラテジーの違いがあまりないという特徴が現れている。例(41)~(43)を見てみよう。

(41) 「弁明+条件」 JJ (先輩・親) 22%

なんか宿題とかレポートで忙しいんですよ。バイトとかもやってるし、そうだな、でも、なんか一日ぐらいだったら、どうにかして。

(42) 「弁明のみ」 JJ (同・親) 40%

最近アルバイトしてますよ、知ってた？

(43) 「弁明+回避」 JJ (同・親) 25%

僕のほうも今忙しいんで、ちょっと……

例(41)のような「弁明+条件」先行型が「上親」には多く選択され(22%)、「同親」には5%しか用いられていない。目上の人には「弁明」した後、「条件」を提示するのがJJに好まれるとみえる。「上親」と比べ、「同親」には例(42)のような「弁明のみ」が多く使われている(40%)。また、「同親」には例(43)のような「弁明+回避」が2番目に多く、「上親」(11%)と大きな差がある。

「弁明のみ」(例44)のほか、JJに使用率が高いのは「弁明+条件」(例41)「弁明+回避」(例45)である。

(44) JJ (同・疎) 「弁明のみ」

A: 学園祭の準備手伝っていただきたいんですけど。

B: 今、すごい、めちゃくちゃ忙しいんですよ。

(45) JJ (先生・疎) 「弁明+回避」

A: 中国語の翻訳の部分をちょっと手伝ってもらいたいけど、どうでしょう。

B: ちょっと、今すごく忙しいときで、ちょっと忙しいんですよ、やれるかどうかちょっと……、はい

JJの「親疎」によるストラテジーの相違も観察された。目上の相手(「上親」と「上疎」)には、「わび+弁明」「弁明+わび」の使用率の違い、同等の相手(「同親」と「同疎」)には「弁明+代案」「弁明+わび」「弁明+回避」「弁明+条件」の使用率の違いがそれぞれ見られた。

「弁明のみ」のほか、JJが「弁明+条件」「弁明+回避」を多く選択していることに対して、CCは「弁明+代案」型を多く用いている。CCの「親疎」によるストラテジーの違いが数量的に現れたのは次の項目である。目上の相手(「上親」と「上疎」)に見られたのは、「弁明のみ」「弁明+不可」「弁明+回避」の3項目である。同等の相手に(「同親」と「同疎」)に見られたのは、「弁明のみ」「弁明+不可」「弁明+代案」「不可+弁明」「不可のみ」「弁明+わび」「弁明+回避」の7項目である。

CCには「上下」によるストラテジーの相違が顕著なのは、親の相手(「上親」と「同親」)に断る際の「弁明+代案」先行型の一ヶ所である。

CJ-上級がCCのストラテジーと似て、JJのストラテジーと異なる項目は、目上の相手(「上親」と「上疎」)に断る際の「弁明+回避」である。その他、「弁明+不可」の「親疎」(「同親」と「同疎」)の差がCCよりも大きく、疎の相手には、用いすぎるおそれがある(JJは0%である)。

CJ-中級が目上の相手(「上親」と「上疎」)に断る際に用いる「不可+弁明」先行型の「親疎」の相違がCCのそれに類似し、JJのそれと異なるため、トランスファーの一つと

表3.10 「弁明+条件」

	上親	上疎	同親	同疎
JJ	22	16	5	15
CJ-上級	0	15	0	20
CC	11	5	5	0

判断する。

ここで、CJ に一つの特徴が観察された。CJ-上級も、CJ-中級も独自の「親疎」(CC とは違う) ルールを作っているようである。たとえば、次の数字で表しているように、「弁明+条件」先行型の使用においては、CJ-上級が「親疎」による戦略の違いを表している点では、CC と同様であるが、そのパターンが異なっている。

前にも述べたように、積極的に働きかける条件提示の方略はポジティブ・ポライトネスの戦略である。「弁明」してから、「積極的な条件」を提示するのは、JJ が目上の人に対して多く用い(例43)、より敬意を表そうとするときに見られる。しかし、CJ-上級は、疎の相手のみに用いている。目上の親しい相手にももっと積極的に使用すべきだろう。

ここでも、意味公式の頻度でみたように、JJ は「上下」による戦略の違いが見られたが、「親疎」の違いもいくつか見られた。CC はより「親疎」を重要視している傾向がみられた。但し、日本人の場合、「上下」による戦略の違いが、親しい関係の中でより顕著に現れた。疎の相手に対しては、上であろうと、同年輩であろうとそれほど差がなかった。実際、「親しき中にも礼儀あり」という言葉を日本人へのインタビューからも得られた。一方、中国人の方は、親しければ、目上の人でも同年輩の人でも友達であるということ、データからも、インタビューからも見てとることができる。

また、CJ-中級と上級にはそれぞれトランスファーが見られた。

3.2.3 まとめ

3.2.1と3.2.2をまとめると、次のようなことが分かる。

JJ の「上下」による戦略の違いは全部で10ヶ所で、「親疎」による違いは12ヶ所となっている。「親疎」のほうがやや多いが、どちらをより重要視しているとは判断しにくい結果になり、日本人は「上下」で戦略を選択しているという説は、本研究では支持していない。本研究の調査の被験者が少ないことや目上の相手(先生と先輩)を分けずに分析したことが結果に影響を与えた可能性があると考えられる。

CC に「親疎」による戦略の違いは16ヶ所、「上下」による違いは3ヶ所見られ、これは、中国人は「親疎」で戦略を選択する説を支持していると考えられる。

CJ-上級にトランスファーと見られたのは、「直接的な断り」(「同親」と「同疎」と「弁明+回避」先行型(「上親」と「上疎」)の使用である。CJ-中級にトランスファーが見られたのは、目上の相手に対する「わび」の頻度の低さと「不可+弁明」(「上親」と「上疎」)の使用である。

3.3 L2 能力と L1 プラグマティック・トランスファーの関係

この節では、CJ-中級と CJ-上級のプラグマティック・トランスファーの差を考察する。

学習者のプラグマティック・トランスファーを断り I で見てきた。「親疎」によって戦略を選択する母語のトランスファーがいくつか見られた。これ以外に、「親疎」とは関係ないが、意味公式の頻度の高低で CC と近似しているところが中級学習者に見られた。

2.1で述べたように、L2 能力が低い方が L1 のトランスファーが多い (Maeshiba ら1996, Takahashi & DuFon 1989など) 及び L2 能力が高い方がトランスファーしやすい (Beebe ら1987など) という2つの正反対の説があるが、本研究は、言語習得の普遍的発展の観点から、Maeshiba ら (1996) と同じ結果が得られると仮定し、本研究の仮定が検証されるかどうかを見ていく。

3.2で CJ-中級と CJ-上級に観察されたトランスファーを表3.11のようにまとめることができた。

表3.11 中級及び上級のプラグマティック・トランスファー

意味公式	CJ-上級		CJ-中級	
	上親・上疎	同親・同疎	上親・上疎	同親・同疎
直接的な断り	/	PTあり	/	/
わび	/	/	頻度の低さがCCと似ている	/
弁明+回避	PTあり	/	/	/
不可+弁明	/	/	PTあり	/

注：・ PT あり=プラグマティック・トランスファーが見られた
/ = プラグマティック・トランスファーが見られなかった

表3.12 CJ-中級のプラグマティック・トランスファー

相手	意味公式	JJ (%)	CJ-上級 (%)	CJ-中級 (%)	CC (%)
上親	わび	11	12	6	5
同疎	条件提示	20	20	11	5
同疎	弁明内容ぼかし表現	80	70	33	37
上疎	弁明+条件提示	16	15	6	5
同疎	弁明+回避	15	15	5	0

表3.13 CJ-上級のプラグマティック・トランスファー

相手	意味公式	JJ	CJ-中級	CJ-上級	CC
上疎	回避	26%	28%	10%	5%

CJ-上級とCJ-中級の「親疎」による違いのトランスファーがそれぞれ2ヶ所と1ヶ所見られた。これ以外に、中級は頻度の高低でCCと近似し、JJと異なるものが1ヶ所あった。

また、表3.11以外に、個々の意味公式において、CJ-中級がCCに類似し、JJと異なるパターンが見られた(表3.12)(CJ-上級はJJに類似している)。

これに対して、CJ-上級がCCと似て、JJと異なるパターンは1ヶ所しか見られなかった(表3.13)(CJ-中級はJJと似ている)。

以上を見ると、CJ-中級の方(7ヶ所)がCJ-上級(3ヶ所)より多く母語のトランスファーがあると言える。

回りの中国人日本語学習者及び筆者自身の経験(日本滞在3年)では、日本に来てから1年目の行動とそれ以後の行動では大きな差がある。日本に来てから1年ぐらゐの間は母国にいるときとあまり変わらない行動をし、2年、3年目になると、だんだん日本語の社会文化規範に同化し、言語行動も日本人と似てきて、遠慮深くなり、いつの間にか日本人と似たようなパターンになるようである。日本社会に合わせていくことに対して抵抗する人もいるが、社会とどのぐらい接触しているのかが語用論能力に大きく影響していることは否定できないだろう。

本研究の被験者である中級学習者の日本滞在歴は0.3~2.5年となっているのに対して、上級は1年~8年となっている。それが、中級学習者がより母語に頼り、母語のトランスファーが多く見られた原因の一つとも考えられる。

4. 結論

①論文のまとめ及び日本語教育への示唆

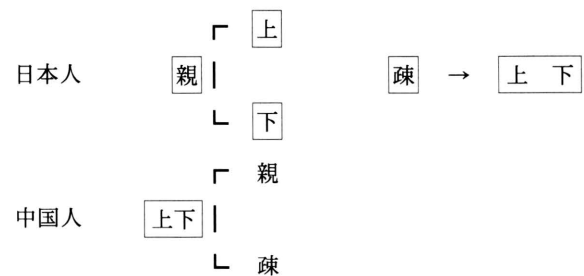
以上、「ガイドブックを翻訳してほしい」及び「学園祭の準備を手伝ってほしい」という二つの依頼を断る発話行為を考察し、JJ, CJ, CCの「断り」を断りIと断りIIに分

け、断りIのみに対する分析を試みた。その結果、次のようなことが明らかになった。

まず、全体的に中国語母語話者は「親疎」をより重要視し、断りの戦略を選択していることが分かった。しかし、日本語母語話者には、「上下」と「親疎」の優位順がはっきりしていないため、日本人は「断り」を行う際、「上下」を一番の判断基準として用いられているという説を支持していなかった。

日本語母語話者の一つの特徴は親しい目上の人と同等の人には、「上下」による差が大きいが、親しくない目上と同等の人には、それほど差がなかった。疎は「外」として扱われているとみえる。日本人は「外」の人に対しては、「上下」の基準よりも、「外」独自の一定の基準(距離を置くなど)で戦略を選択していると見える。中国語母語話者と日本語母語話者の特徴を以下の図で表すことが出来る。

図



全体的に学習者の「断り」行動に対する戸惑いが窺われた。日常生活で遭遇しそうな場面を設け、教室で学習者に練習の機会をもっと与えるべきであろう。学習者の発話の問題点を指摘しながら「断り」の戦略を提示することが大切ではないかと思われる。

また、次の三つの観点から、上級学習者、中級学習者にプラグマティック・トランスファーがみられた。

上級学習者、中級学習者ともに見られたのは
イ) 母語の「親疎」で戦略を選択することによるトランスファー(表3.11を参照)である。

中級学習者のみに見られたのは

ロ) 目上の相手に断る際の意味公式の頻度の高低(表3.11を参照)

ハ) 個々の意味公式の頻度の高低(表3.12, 表3.13を参照)

によるトランスファーである。

上級学習者と中級学習者のトランスファーの差も見られた。全体的には中級学習者の方が上級学習者より多い。本研究の被験者のCJ-中級は日本社会とのつきあいが短い(0.3~2.5年)ため、日本語母語話者のストラテジー、日本語の適切さなどを十分心得ていないと窺われる。母語の中国語に頼る部分が上級学習者より多いのは語用論習得の自然の過程とも思える。しかし、日本語教育で語用論知識の不足を補うこともできるはずである。

学習者の母語のトランスファーは、コミュニケーションに与えた負の影響をいくつか浮き彫りにした。学習者には親しい目上の人にも友達と話しているような感覚で話す傾向が見られたが、これでは、失礼に思われることもあるだろう。特に、目上の人に「直接的な断り」を使用することで、人間関係を損ねることになりかねない。また、「条件提示」の頻度の低さ、中級の「わび」の少なさも人間関係をぎくしゃくさせる要因になるかもしれない。

実際の「断り」ストラテジーの指導において、次のようなことが提言できるのではないと思われる。目上の親しい人には、礼儀正しさを忘れてはいけない。「直接的な断り」よりも「弁明のみ」や「弁明」してから「条件提示」、「回避」のストラテジーの方が好まれる。疎の人には、「具体的な事情説明」よりも「忙しい」などのぼかし表現で十分だろう。長々と説明していると、かえって、言い訳のように感じられるおそれがある。理由説明なし、或いは能力否定をした後すぐ代案を述べるのもやかましく思われることがあると考えられる。実際の教室では、依頼側と断る側の上下親疎関係を設定して、より適切な「断り」のストラテジーを提示し、学習者にロール・プレイなどの練習をさせることが有効的であろう。

② 論文の問題点及び今後の研究への展望

本研究では学習者の二つの依頼に対する「断り」のストラテジーを母語話者のそれと比べ、プラグマティック・トランスファーがあるかどうかをみてきた。その結果、負のトランスファーがいくつか見られた。このような結果は、今後、中国人日本語学習者に「断り」に関する語用論的知識を教えるのに役立つと思われる。学習者のアイデンティティを考慮し、負のトランスファーを学習者に注意させることが、これからの日本語教育において重要になっていくだろうと考える。

学習者へのインタビューでは「日本語で断るのがとても難しい」という人が多かった。このような語用論的知識をいかに日本語教育に生かすのかが今後の課題の1つであろう。

本研究の調査では、ロール・プレイの依頼側の場面(付録のAを参照)をある程度詳しく設定したが、「1回断られ

たら依頼をやめる」、或いは「1回断られたあともう一回依頼する」のような回数的な面まで設定を行っていなかったため、結果として被験者によって2回依頼する人もいれば1回で依頼をやめる人もいた。依頼側の個人差がデータに影響を与えていた可能性がある。依頼側を同じ人にするか、依頼側の場面設定をもっと詳しくすべきであった。

また、ロール・プレイを行った際、1ペアの二人の現実の関係が知り合いか友達のため、同等の親しい人と親しくない人の役はやりやすかった反面、先輩、先生の役をするのが難しかったという被験者の感想があった。現実の関係も多かれ少なかれ関わっているようにも思われる。もっと実際の会話に近いデータを得るための場面設定をすべきだったのかもしれない。

被験者数を増やすことや性別、世代間による違いを考察することも今後の課題として残されている。被験者のレベルの測定、意味公式の再構築なども、もっと吟味するべきだろう。これらを今後の課題としてあげておきたい。

注

- 1) 「丁寧さのルール」は英語の politeness principle の訳であり、ここの「丁寧さ」は日本語の敬語などの丁寧表現よりも広い意味で用いられる。「会話の作法」「適切さのルール」と解釈することができる。
 - 2) 意味公式(semantic formulas)は、Cohen & Olshtain (1981)が母語話者と非母語話者の発話行為を考察する際に採用した機能単位である。「断り」の研究では Beebe et al (1987, 1990)の分類方が広く使われている。
 - 3) DCT (Discourse Completion Test) (談話完成テスト)とは、ある発話場面を設定し、相手との社会的関係(親疎・地位の差・力関係・知人かどうかなど)や具体的な場面が明記してあり、回答者がそのような場面でのように発話するかを空欄に書き込む形式の実験方法を指す(藤森1996)
 - 4) ロール・プレイ(Role Play) (役割演技)とは、断りのなされそうな具体的状況を提示して、その場合なんというかを口頭で被験者に答えさせる(会話してもらう)方法である(熊谷1993)。
 - 5) Beebe et al (1990)での分類は以下の通りである。
 - I Direct
 - A. Performative
 - B. Non-performative statement
 - II Indirect
 - A. Statement of regret
 - B. Wish C. Excuse, reason, explanation D. Statement of alternative
 - E. Set condition for future or past acceptance
 - F. Promise of future acceptance
 - G. Statement of principle H. Statement of philosophy
 - Attempt to dissuade interlocutor
 - J. Acceptance that functions as a refusal
 - K. Avoidance
- Adjuncts to Refusals
1. Statement of positive opinion/feeling or agreement

2. Statement of empathy
 3. Pause fillers
 4. Gratitude/appreciation
- 6) 母語話者の選定はもっと検討すべきであろう。これは今後の課題としたい。
 - 7) 牧野1986 Japanese Descriptions-speaking の初級, 中級, 上級及び OPI (oral proficiency interview) の判断基準を参考した。
 - 8) ここの「…」は途中終了の意味として使用した表記であり, 本研究で使われている場合, すべてこれと同じ意味をする。
 - 9) 「回避」の中の驚きの繰り返し「30ページ!」に対して, ここは驚きなどの感情表示がなく, 相手の発話を自己確認のような語調で繰り返している。
 - 10) 本研究では, 付随表現を分析しないため, この表にその頻度を出さないことにした。

付録

ロールプレイカード 1 例 (A 日本人 ↔ B 中国人日本語学習者)

① 翻訳してほしいという依頼を断る

<p>A</p> <p>あなたは留学生の世話をしている50代の教官です。留学生向けのガイドブック作成を計画しています。絵も入れて全部で30ページぐらいあります。分かりやすくするために, 日本語の下にそれぞれ英語訳, 中国語訳, 韓国語訳をつけることにしました。今から2週間以内に完成させる予定です。中国語訳の部分は中国人のBさんに頼んでみることにしました。Bさんは中国からの留学生で, 留生活動の準備を何回か手伝ってくれたことがあります。Bさんのことはよくは知りませんが, 熱心そうなので頼んでみることにしました。今, Bさんを研究室に呼んできたところです。Bさんに頼んでみてください。</p>	<p>B</p> <p>あなたは学部の留学生です。最近は宿題やレポートが多く, 毎日が忙しいです。それに, アルバイトもやっているのだから, 本当に疲れています。ほかの事は, 実際何もできない状態です。A先生に呼ばれたので, 何だろうと思いつつ, A先生の研究室に行きました。A先生は留学生の世話をしている50代の先生です。留生活動の準備などを手伝っていた時, 先生と何回か話したことはありますが, 親しくはありません。A先生に何か頼まれますが, あまりやりたくないと思っています。</p>
---	---

注: 被験者Aは親しい先生, 親しくない先生, 親しい友人, 知り合いの4役を演じる

② 学園祭の準備を手伝ってほしいという依頼を断る

<p>A</p> <p>あなたは大学生です。あなたが入っているサークルは今年も学園祭に出ることになりましたが, その準備がとても大変です。学園祭まであと3週間しかない。今から準備しないと間に合いません。準備の責任者はあなたなので, サークルの人にひとりひとりアタックし, 準備を手伝ってくれるように頼んで</p>
--

います。同じサークルのBさんにも頼んでみます。
Bさんは親しい同級生(中国からの留学生)です。図書館の前でBさんと会ったので, Bさんに頼んでください。

B

あなたは学部の留学生です。最近は宿題やレポートが多く, 毎日が忙しいです。それに, 新しいアルバイトを始めたので, 本当に疲れています。図書館の前で, 同じサークルの親しい同級生Aさんと会いました。
Aさんに何か頼まれますが, あまりやりたくないと思っています。

注: 被験者Aは親しい先輩, 親しくない先輩, 親しい同級生, 親しくない同級生の4役を演じる。

参考文献

生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号 pp.41-52

カノノックワン・ラオハブラカキット (1995) 「日本語における「断り」—日本語教科書と実際の会話との比較」『日本語教育』87号 pp.25-39

熊井浩子 (1992) 「外国人の待遇行動の分析(1)—依頼行動を中心にして—」『研究報告 人文・社会科学編』第28巻第1号 静岡大学教養部

熊井浩子 (1993) 「外国人の待遇行動の分析(2)—断り行動を中心にして—」『研究報告 人文・社会科学編』第28巻第2号 pp.静岡大学教養部

熊谷智子 (1993) 「研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—」『日本語学』第12巻第12号 pp.4-12

鯨島重喜 (1998) 「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程—中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」の場合—」『日本語教育』98号 pp.73-84

ジョージア・M・グリーン (1995) (深田淳訳) 『プラグマティック・ストは何か—語用論概説』産業図書

高田誠 (1992) 「コミュニケーションの対照研究」『言語』第11巻13号 pp.44-53

高田誠 (1993) 「語用論と言語の研究」『日本語教育』79号 pp.11-25

鶴田庸子, ポール・ロシター, ティム・クルトン (1988) 『英語のソーシャルスキル』大修館

テレンス・オドリ (1995) (丹下省吾訳) 『言語転移—言語学習における通言語の影響』リーベル出版

初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」『日本語教育』88号 pp.128-139

目黒秋子 (1994) 『「謙遜型」断りのストラテジー』『東北大学文学部日本語学科論集』第4号 pp.99-110

藤森弘子 (1995) 「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』87号 pp.79-89

藤森弘子 (1996) 「関係修復の観点から見た「断り」の意味内容—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」『大阪大学言語文化学』5 pp.5-17

彭飛 (1990) 『日本人の言語慣習に関する研究』和泉書院

ポリ・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘ストラテジーの考察』くろしお出版

- 李威 (1999) 「日・中・韓母語話者の「断り」行為の対照研究」 日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.181-186
- ロッド・エリス(金子朝子訳)(1996)『第二言語習得序説 The Study of Second Language Acquisition』 研究社出版
- 山口和代(1997)「コミュニケーション・スタイルと社会文化の要因—中国人及び台湾留学生を対象として—」 『日本語教育』93号 pp.38-48
- 山梨正明 (1991)『発話行為』 大修館
- 横山杉子 (1993) 「日本語における、『日本人の日本人に対する「断り」』と『日本人のアメリカ人に対する「断り」』の比較—社会言語学のレベルでのフォリナートーク—」 日本語教育81号 pp.141-151
- Austin, J. L. (1962) *How to DO Things with Words*. Harvard University Press. (坂本百大訳1978『言語と行為』大修館書店)
- Beebe, L.M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R.(1990) Pragmatic transfer in ESL refusals In R. Scarcella, E. Andersen, and S. Krashen (eds.), *Developing Communicative Competence in a second Language* pp.55-73 (Newbury House).
- Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (1989) (Eds.) *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies*. Norwood, N.J.: Ablex.
- Blum-kulka, S. (1982). Learning to say what you mean: A study of speech act performance of learners of Hebrew as a second language. *Applied Linguistics*, 3, 29-59.
- Brown, L.& S. Levinson.(1987). *Politeness: Some Universals and Language Usage*. Cambridge University Press.
- Chen, X., Ye, L., & Zhang, Y. (1995) Refusing in Chinese. In G. Kasper, *Pragmatics of Chinese as native and target language PP.119-163* Honolulu, Hawaii: University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.
- Cohen, A., & Olshtain, E.(1981) Developing a measure of socio-cultural competence: The case of apology. *Language Learning*, 31(1) pp.113-134.
- Kasper, G(1995) It's Good to be a Bit Chinese: Foreign Students' Experience of Chinese Pragmatics. In G. Kasper, *Pragmatics of Chinese as native and target language* pp.1-22 Honolulu, Hawaii: University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.
- Kasper, G. & Schmidt, R.(1996). Developmental issues in interlanguage pragmatics. *SSLA*, 18, 149-169.
- Leech, Geoffrey(1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.(池上嘉彦/河上誓作訳『語用論』 紀伊国屋書店1987)
- Maeshiba, N., Yoshinaga, N., Kasper, G., & Ross, S.(1996). Transfer and proficiency in interlanguage apologizing. In S. Gass & J. Neu(Eds.), *Speech acts across cultures*. pp.155-187 Berlin: Mouton.
- Major, R.C.(1986) The ontogeny model: Evidence from L2 acquisition of Spanish r. *Language Learning*, 36, 453-504.
- Makino, Seiichi (1986) Japanese Descriptions-Speaking. *ACTFL*
- Olshtain, E. & Cohen, A.(1983). Apology: A Speech-Act Set. *In Sociolinguistics and Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- Robinson, M.(1992) Introspective methodology in interlanguage pragmatics research. In G. Kasper (Ed.), *Pragmatics of Japanese as native and target language pp. 27-82* Honolulu, Hawaii: University of Hawaii, Second Language Teaching & Curriculum Center.
- Takahashi, T., & Beebe, L.M. (1987). The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. *JALT Journal*, 8, 131-155
- Takahashi, S. (1996) Pragmatic Transferability *SSLA*, 18 pp. 189-223 Cambridge University Press.
- Takahashi, S & Dufon, M.(1989). Cross-linguistic influence in indirectness: The case of English directives performed by native Japanese speakers. Unpublished manuscript, Department of English as a Second Language, University of Hawaii at Manoa. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 370 439)
- Tanaka, N.(1988). Politeness: Some problems for Japanese speakers of English. *JALT Journal*, 9, 81-102.
- Taylor, B.(1975) The use of overgeneralization and transfer learning strategies by elementary and intermediate students of ESL. *Language Learning*, 25, 73-107.
- Thomas, T(1995) *Meaning in interaction—an introduction to pragmatics*. Longman. (浅羽亮一訳『語用論入門』研究社1998)
- Wenk, B.(1986). Crosslinguistic influence in second language phonology: Speech rhythms. In E. Kellerman & M. Sharwood Smith (Eds.), *Crosslinguistic influence in second language acquisition* (pp.120-133). New York: Pergamon Press.

【付記】

本研究において、指導教官としてご指導くださった板橋義三先生、松村瑞子先生、井上奈良彦先生にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。また、調査のデータ収集にご協力くださった、日本の方々、中国からの留学生のみなさんに心から感謝を申し上げます。